



LA NOUVELLE

N°32

PRINTEMPS

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者 川口裕司 (1981/昭56)
2024.4.1 発行

第28回サロン仏友会

11月19日(日)、第28回サロン仏友会を会場参加とオンライン参加のハイブリッド形式で実施した。会場の大手町サンケイプラザには30名の会員が集結。オンラインでは14名が参加した。

はじめに、川口裕司(1981)仏友会会長より開会の挨拶と講師紹介があり、旅行作家・翻訳家の鈴木光子氏(1961)が登場。本来は会場での講演予定であったが、体調が優れず急遽Zoomでのオンライン講演に切り替えた。当日、機器のトラブルにより十分伝えきれない部分もあったが、講師本人によるまとめ記事(下記)を参照されたい。

懇親会では、和賀副会長(1970)による司会のもと、参加者がボジョレ・ヌヴォなどのグラスを手に再会を楽しんだ。春の総会では、一層会場参加者が増えることを期待している。

(幹事 中村日出男記)

『駐日スイス公使が見た第二次世界大戦』 ～カミーユ・ゴルジェの日記

鈴木光子 (1961/昭36)

ともかく、作業、出来上がりとも高張った翻訳本になりました。A5判で厚さ約5センチ、重さ約1キロ、583ページという代物です。足掛け5年、集中するため自宅を整理して、老人ホームに移っての翻訳作業となりました。

ところでまず、タイトルをつけるのはかなり微妙な作業だということを経験しながら再認識させられました。タイトルは筆者や訳者につける権利がなく、出版社の権限であるから、その慣行は皆様もとうにご存じの事でしょう。

日記を書く人は普通タイトルをつけませんが、驚くことにこの筆者のカミーユ・ゴルジェは、自分のタイプ原稿の導入部分に、『日出ずる国の崩壊』として、日本が戦争に負けることを予知したようなタイトルをつけてしまっています。つまり彼には、日記としてより、物語として外部に公表する意図が十分にあって書き始めたものと推定ができるのです。

この導入部分を別として、日記本体は1940年の赴任に始まり、戦争突入から1945年の天皇の玉音放送まで、一応年月日を記入しています。しかし敗戦の日から、本国スイスへの帰国



スイス大使館を訪問された時の鈴木光子氏

時までの約4ヶ月間は、期日は無記入のままです。意図的にそうしたことは明らかですが、それが失意のあまり記録という作業を放棄したのかどうか誰にも語らず、またその理由はどこにも触れられていません。

大正末期に一度目の来日を果たして、日本への憧れを膨らませていたゴルジェが、この二度目の来日の終末として見る日本の無残な敗戦に、大きな失意を抱えて本国に戻ったのは明らかで、それはマッカーサーの進駐や敗戦国の無気力にさらされた、愛する日本を眼前にしたゴルジェの当然の反応であることは想像に難くありません。

この日記は、スイス帰国後に半分放置された状態で、外部からのアプローチを待って、ようやく息子が孫娘が整理して外部に出したという裏話が語る通り、失意のゴルジェ自身に最終的な出版の意図が保たれたかどうかは不明のままです。

こうした一貫性を欠くような、膨大な5年間の日記をどう紹介したら良いのか？

ここでハウザー教授とドンゼ教授という二人のスイス人教授の意思と行動が躍動します。この本に『前書き』、『後書き』を寄せている熱意から見て、彼らが遺族を説き伏せて公表に至ったものと推定されます。この二人の教授は、自らの執筆部分を加えてこの本を出版するという方法で、読者を誘導しようとしているようです。

失意のゴルジェ自身も、出版の希望を決して失っていなかったと推定されます。何故なら、出来上がった本では導入部分はイントロダクションとして独立した章を成していますが、タイプ打ちの元原稿では、このイントロダクションは日記の一部としてそのまま日記に続いており、原本も同じスタイル、同じタイプライターで打ち続けられている、という事実を見ても、ゴルジェ自身の、「本」としての集大成への願望は明らかであり、彼が意図した形体を、出版社の大阪大学出版会は見事に取り入れたということになるでしょう。

こうして、日記とその背景との一貫性が取れるというわけで

すが、この著書には、上記のジュラ地方出身の二人のスイス人若手教授の「前書き」「後書き」が加えられています。

最も注目すべきは、「後書き」にあるベルジェ委員会に関する叙述でしょう。

——1996年から2001年にかけて、スイス政府の委任を受けたある一つの重要な委員会が、独立した専門家を集めて編成され、第二次世界大戦中のスイスとドイツの関係について歴史的な研究と考察を発表した。その最終報告が2002年に発表された。その中で、携わった歴史研究家たちによって進められた、亡命ユダヤ人に対するスイス政府の政策や銀行の果たした役割が、対戦中に動員された兵士たちの記憶とは矛盾するものがあることが明らかになったのである。前者が第三帝国に対して行った経済的な援助が、ドイツ軍のスイスへの侵入を防いだとする見解に対し、後者は、彼らこそが、国境地点において、自身の血と肉を以って、ドイツ軍の脅威に対抗して、寒さや疲労を体験した当事者であるとしたからである。——

これは、歴史解釈には相反する現象が常にあり、読者もまたそうでない人も、常にこの相反性に注目しなくてはならないという示唆となっています。こうして、歴史を少なくとも二面以上から見る、というアプローチが秘められているわけですが、この膨大な日記を退屈せずに読み通すには、こうした枠組みをあちこちに当てはめて読んでみるのもいいかと思えます。

この膨大な翻訳書には、上記の日記の他に、『テーマ別ノート』や、10ページに上る人名索引も加えられており、同時代のスイスと日本を知る上で、他に類を見ない資料ともなっています。



サロン仏友会会場に直接参加した会員の皆さん



Zoom参加者のスクリーン・ショット

泣く子も黙る憲兵になった大先輩、大山勉

高田信二 (1980/昭55)



「大杉栄、中原中也、石川淳…、外大出身者は反逆者ばかりじゃないか。特にフランス語科は！」。もう半世紀近い昔の西ヶ原キャンパスの教室で某教授が講義中にこう皮肉交じりに言い放った言葉が今でも忘れられません。

大杉栄はアナキスト、中原中也はランボーの翻訳も手掛けた今でも人気の詩人、石川淳は無頼派作家。いずれも東京外国語学校(当時)の仏語出身で、我ら仏友会の誇るべき大先輩

です。某教授は天下の東大出身ですから、上から目線のマウンティングでもしたかったのでしょう。「反逆者？上等じゃねえか。俺はそんな反逆者に憧れて、外語の仏語を選んだんだ。東大なんて、体制ベッタりのたかが官僚養成学校じゃないか。若き私は反発したものでした。

私は、外語大を卒業して、ジャーナリストの道を選び、政官財界人から芸能、スポーツ選手に至るまで取材する機会に恵まれ、世の中のカラクリを見てきました。世間というものには「体制派VS反権力者」といった単純な構造ではないことは熟知しました。大杉栄の殺害を指示した甘粕正彦憲兵大尉も実は大変な人格者で、国家の行く末を危惧する愛国者だったことを知れば尚更です。

それでも、個人的に東京外語の仏語科出身者は、反権力者であってほしいという密かな願望がありました。そのせいか、小生の良友である名倉有一さんという在野の歴史研究者から、大山勉という東京外語仏語出身で、戦時中は憲兵だったという人物の存在を知らされた時は大いに驚きました。大山は、外語仏語出身なのにいわゆる「体制派」です。そんな人がいたとは！

以下は、名倉氏が先行研究から調査し、1998年までに当時御存命だった大山勉の外語仏語科の同級生8人を発掘し、手紙のやり取りなどで、明らかになった大山勉の人物像です。

大山勉は1915年、群馬県で生まれ、79年、64歳ぐらいで都内で亡くなっております。生没年と出生地はいずれも推測です。東京外語会94年版名簿などによると、33年に東京府立四中(現都立戸山高校)を卒業し、35年、東京外国語学校入学、39年に仏語貿易科を卒業。その後、憲兵として、仏印のサイゴン(現ホーチミン)やビルマ、そして東京に赴任したようです。名倉氏が大山勉に注目したのは、池田徳眞著「日の丸アワー」

の中で、対米謀略放送施設があった東京の「駿河台分室」で、協力を拒否した英国人の捕虜ウィリアムズを東京憲兵隊本部に連行した警備担当の憲兵軍曹としてこの大山が登場していたからです。同書74ページにこんな記述があります。「彼の部屋をみると、これまた不思議である。フランス語の本がずらりと並んでいて、彼自身はブラヤモウパッサンの小説を仏語で読んでいる。それは、私たちの憲兵というイメージとだいぶ違うので聞かされたらと、彼の言うには『私は仏文卒で、仏語の勉強を命じられているのです』とのことであった」



大山勉氏

また、大山勉の外語時代の同級生武博宜(当時、恐らく83歳ぐらい)は、名倉氏の質問に98年2月19日付の書簡で「(大山は)時折改造社あたりから出版されたブハーリン、トロツキーなどの書籍を小脇に抱えていたのを覚えています。後年憲兵になった一恐らく志願したのでしょうか—ことを思い合わせると異(ママ)和感を覚えます」と思い出を語っています。

戦時中は、先述したように、大山は仏印のサイゴン憲兵隊に転勤した際、外語同級生の木村寿栄吉(貿易会社員から南方総軍の報道部に徴用され、開戦の日から一年間、サイゴンの情報部に勤務)が同地で会ったことを、名倉氏への書簡(98年2月24日と4月2日付)で明らかにしています。

戦後は、「大山憲兵は、富士山麓の農民の先頭に立って、米軍の実弾射撃訓練に反対する行動を指導しているという噂(88年8月30日付、同級生の谷山樹三郎から名倉氏宛て書簡)がありました。先述の同級生武博宜は「戦後大山君が、『反戦』『反米』の立場をとっていたかどうかについては、全く心当たりがありません。彼との間にその種の話は交はした記憶もありません」と名倉氏宛ての書簡(98年3月24日)で応えています。また、武博宜は、98年2月19日付の名倉氏宛て書簡で、「(大山と)最後にクラス会で会った時は身体がすっかり不自由になり、気力も衰えていました」と明かしています。

そのクラス会とは、1975年ごろで、大山勉はその4年後に64歳で亡くなったと推測されています。

周囲にいた同級生の思い出から、大山勉という人物は長身で、大変聡明な上、真面目で勉強家だったようですが、どうも矛盾に満ちた人物でもあったようです。ただ、東京外語仏語出身の矜持は最後まで失わず、仏語の勉強を怠らなかつた姿は、我々後輩として、感銘を受けざるを得ません。(一部敬称略)

第28回仏友会総会のお知らせ

- ◆日時：2024年4月21日(日) 14:00～17:00(予定)
14:00～総会 14:30～講演会 15:45～懇親会
- ◆会場：大手町サンケイプラザ 201・202号室
(東京メトロ大手町 E1出口)
※総会と講演はオンラインで同時配信の予定です。
- ◆講師：伊藤朋子氏(1985/昭60)
笹川日仏財団東京事務局長、赤い翼実行委員会事務局、日仏経済交流会パリクラブ副会長
- ◆演題：「パリから東京への再挑戦
—日仏航空史の1ページ—



1936年(昭11)パリから東京への100時間飛行レースに挑んだ男がいた。しかし佐賀県の山麓で遭難。重傷だったが地元民の手厚い看病によって〜というくだりから始まる史実をご存知だろうか？そして約80年後、この飛行士がなし得なかった無念の佐賀—東京区間飛行のリベンジを、その子孫たちがもくろんでいるということも。日本の航空史はフランスとの関わりから始まったことにも触れながら、複雑で込み入った今の地上を忘れて、しばし空に目を向けてはいかがでしょう。

◆参加費：会場＝6,000円、オンライン(Zoom)＝無料
会場では通信費1,000円/年も同時に受け付けます。

◆申込×切：4月8日(月)
仏友会にメルアド登録済みの会員には既にご案内済みですが、会員未登録の方も是非、下記アドレス宛てにメールでお申し込みください。お待ちしております。

◆申込先：山崎るり子 ruche_blanche@yahoo.co.jp

《フランス語圏だより》 Madame Saké と呼ばれて

藤田邦子 (1993/平5)

「風が吹けば桶屋が儲かる」ということわざがありますが、これに私の半生を当てはめてみれば、「外語でフランス語を学ばばカナダで日本酒の魅力を語る」となりますでしょうか。

東京でOLとしてくすぶっていた時、偶然に街中で再会した外語の大先輩（そして中高時代の恩師）に勧められ受けた、外務省の専門調査員試験。無事に合格し、在フランス日本国大使館の文化広報班にて、「フランスにおける日本年」や「パリ日本文化会館の開館」に携わる幸運に恵まれました。フランスかぶれとしてワインの勉強はしていたものの、いざパリに着任しての任務は、日本文化の広報。ワイン会の席では必ず日本酒のことを聞かれ、笑ってごまかす始末。笑い皺が凝り固まらないうちにと始めたのが日本酒や和食の勉強でした。

通信教育や書物から始め、その後長い休みを利用しての日本での受講や試験を重ね、勉強を続けました。パリに5年滞在した後、セネガルとモロッコにそれぞれ3年ほど住み、2004年にカナダのモントリオールへやってきました。今年カナダに移り住んで20年目となりますが、その間に「国際唎酒師」「日本酒学講師」「フードアナリスト」などの資格を取得しました。

人生の半分以上が海外での生活となりましたが、パリでの仕事がかっかけて祖国日本の食文化を学び始め、学べば学ぶほど



その奥の深さに魅了されていきました。そしてこの魅力を一人でも多くの方へ届けたいという思いが、当地の人々の熱い好奇心に受け入れられ、現在に至っています。「Madame Saké au Québec - ケベック州のマダム酒 -」と呼ばれ、日本酒をテレビやラジオ、新聞などのメディアを通じてご紹介したり、コーポレートイベントや各種フェスティバルにてワークショップや講演会、試飲会を実施したりしております。

モントリオールがあるケベック州は、特にフランス系文化の影響が色濃く、食の世界においては「北米のパリ」と言われるほど、北米の他地域から一目置かれています。移民を多く受け入れているカナダらしく、あらゆる国の料理のレストランがひしめき合っています。アルコール飲料については、寒い地域らしくおいしいビールができますが、フレンチ文化の影響もあり、ワインの購買・消費量はカナダの他州を大きく引き離しています。

日本酒については、ひと時代前に「SUSHI」がブームとなった際に、「Saké chaud」もその脇役として広まりましたが、現在は、日本食以外の食事にも、ワインと同じような感覚でペアリングしてける日本酒の消費が注目され始めています。「ワインソムリエ」の資格も取得していたお陰で、「リースリングがお好きなら、こちらの日本酒がお気に召すのでは」などと勧めることもあります。

全てのアルコール飲料について政府の専売公社が輸入・販売を取り仕切っている当地において、入手可能な日本の地酒はまだまだ限られたものです。また、輸送費や高額な税金が代金に上乗せされるため、ワインに比べて割高感が否めないのが日本酒です。ただ、専売公社も昨今の日本酒人気を意識しており、

第101回外語祭 フランス語劇

「ノートル＝ダム・ド・パリ」鑑賞記

高村忠良 (1981/昭56 ロシア科)

今年より『東京外語会有志による海外支部歴訪の旅 <https://gaigokai.or.jp/branch/trip> (略称「旅の会」)』事務局長を務めている高村忠良と申します。会長の林義之さん(1966/昭41)から「11月25日に外語祭に行き、模擬店や展示に加えフランス語劇上演日なので、一緒に観ませんか？」とのお誘いを受けました。仏友会から林さんに「鑑賞記」執筆依頼がありましたが固辞をされ、フランス語は小学生時代から縁が深く、50年以上続くロシア語劇のインカレサークル「コンツェルト」に属していたこともあって、小生に要請があり、お引き受けいたしました。

毎年人気のフランス語劇、開演30分前くらいからアゴラ・グローバル入口には多くの方が並んでおられました。「旅の会」の3名は、仏友会のお取り計らいでホール中央来賓席を確保していただき、列に並ばずに入ることが出来ました。開演時には満席に近い状態になり、客席も盛り上がっていました。

「ノートル＝ダム・ド・パリ」はVictor Hugoの原作に基づく悲劇的シナリオで、以前観た、カジモドがエスメラルダの死後も生きていくミュージカル版とは趣を異にするとお聞きしていました。

全体として暗いトーンのお芝居でしたが、主たる配役の方も一般市民役の演者達もうまくまとまっており、練習の成果を感じられる舞台でした。カジモドは醜さ故に虐げられ、屈折しながらも、純な「愛」を心に持つ役を演じ、またフロロは聖職者でありながら、エスメラルダに魅惑され墮ち、最後は拾い育てたカジモドに殺されてしまうという役を演じておられ、お二人



とも役作りには苦勞があったのではないのでしょうか。主たる配役の中で最も印象に残っているのはエスメラルダでした。色彩で表現すれば暗色系で展開していく中で、エスメラルダは唯一明るい色を放った存在でした。特にエスメラルダが最初に登場するダンスのシーンは素晴らしかったです。舞踊の素養が無ければ、あのように華やかに舞台上に現れる事はできないと思い、「踊りながら登場するシーンは華やかな身のこなしでダンサーそのものでした。エスメラルダ役の方はダンスの経験がおありなのですか？」と仏友会の方にお尋ねしたところ、インド舞踊のカタックダンスの活動をされているとのことでした。まさに、はまり役であったと思います。

終演後の記念撮影や仏友会から語劇責任者の盛永さんへのお祝い金贈呈にも同席させていただきました。語劇の伝統が150回、200回外語祭へと受け継がれていくことを願っております。



フランス科語劇「ノートル＝ダム・ド・パリ」の出演者と仏友会応援団

仏友俳句サロン 2

吉田林檎 (「知音」同人)



汝が胸の谷間の汗や巴里祭
楠本憲吉

1990年、西永良成先生からの夏休みの宿題はフランス映画を3本鑑賞してのレポートだった。

外国人教師がつづる外語大の思い出 (No.5)

Du côté de chez TUFs...

Sylvain Detey

C'était il y a 20 ans. J'étais jeune et enthousiaste, je venais de quitter le milieu universitaire britannique, j'enseignais à plein temps et je rédigeais une thèse de doctorat. Le Japon m'avait ouvert ses portes, je me devais de faire de mon mieux. Chance extraordinaire : mon premier poste de chargé de cours universitaire au Japon fut celui que mes collègues de l'époque eurent la générosité de m'offrir à l'Université des Langues Étrangères de Tokyo. ULET, UNALCET, TUFs, GAIGODAI... l'acronyme importait peu, puisque tant de langues et de cultures y étaient enseignées et apprises. Je pris donc place dans le petit train jaune : point celui des Pyrénées, mais bien celui de Tama. S'enclencha dès ce moment une relation à deux versants : celui de l'enseignement de la langue et de la culture française à des étudiants brillants, sérieux et passionnés ; celui de la recherche en linguistique de corpus, grâce au Professeur Yuji Kawaguchi, à ses collègues, et à ses anciens étudiants, à présent en poste dans différentes universités du Japon. La rencontre avec le Professeur Kawaguchi eut lieu quelques mois avant mon départ pour l'Université de Rouen, où je venais d'être nommé Maître de Conférences en Sciences du Langage. Une belle rencontre, puisqu'en 2008 nous lancions à



la MSH à Paris, Boulevard Raspail, le projet Interphonologie du Français Contemporain, dans le sillon du programme Phonologie du Français Contemporain initié par Jacques Durand, Bernard Laks et Chantal Lyche, qui allait croître et embellir jusqu'à ce jour. S'ensuivirent des colloques, des sessions d'enregistrement de corpus, des séminaires, de nombreuses publications, en français, mais aussi en anglais et en japonais, des projets de recherche financés par la JSPS. Des cours de didactique du français aussi, aux étudiants de Master à TUFs, après mon retour au Japon en 2009. Grâce à mon lien avec TUFs, c'est également tout un réseau d'anciens étudiants ou enseignants auquel je me suis senti lié dans mes activités de gestion des partenariats internationaux, en France ou au Japon, parfois via la représentation diplomatique des deux pays, mais aussi les anciens de TUFs, voyageurs ou résidents, séjournant en France. Je me souviens ainsi de la surprise et de la joie de retrouver par pur hasard une de mes anciennes étudiantes de TUFs au Mont Saint-Michel, au beau milieu d'une foule compacte de touristes internationaux, moi qui n'étais allé au Mont Saint-Michel que deux fois dans ma vie ! Je ne compte plus les séries de conférences et de séminaires conjointement organisées entre TUFs et l'Université Waseda qui ont permis de renforcer la dynamique des études linguistiques internationales au Japon, dédiées non seulement au français, mais également à d'autres langues, à commencer par l'anglais, me permettant ainsi de rencontrer des collègues francisants spécialistes d'autres sous-disciplines, tout autant que des linguistes et didacticiens

「Kampai Montréal」などの日本酒イベントを見学し、輸入枠を検討し直すなどの対応が見られます。日本酒やその造りを日本文化の一つとして世界へ広めていくというのは、日本政府の方針の一つでもあり、現在、当地の日本総領事館とも連携しながら、さらなる日本酒文化の広報と日本酒市場の拡大に力を尽くしております。

今年当地で造られた日本酒が販売され始めました。降雪量の多い当地ではお水は豊富。やや硬水のため口当たりが独特ですが、日本酒文化を真摯に学びながら挑戦を続けてほしいと応援しています。

外語でフランス語を学んでいなければ、今のマダム酒はありませんでした。真面目に大学に通ったとは言い難い学生時代でしたが、大学と先生方とクラスメートたちへの感謝の思いでいっぱいです。末筆ではございますが、LA NOUVELLEのさらなるご発展を心よりお祈り申し上げつつ、乾杯！



2023年2月国際民間航空機関での天皇誕生日レセプションにて

観てみたかった「太陽がいっぱい」、POPに熱を感じた「ベティー・ブルー」、そして何かの原点になっていそうな「巴里祭」を鑑賞した。「巴里祭」への予感には当たっていたようだ。

楠本憲吉は俳人である。ある年代の方々は「楠本憲吉は俳句を作るのか！」と驚かれるのではないだろうか。その軽妙洒脱な語り口からマスコミによく登場していたのでテレビの人と思われる方も多いかもしれない。

憲吉は1921年大阪府生まれ。料亭「なだ万」の長男として生まれた。神戸灘中学校では遠藤周作と同級であった。慶應大学に進学すると慶大俳句会を起し、日野草城に師事。俳誌「野の会」主宰など俳句界での活動のほか評論家、エッセイストとしても活躍した。

掲句の季語は「巴里祭」で夏。1933年(昭和8年)に封切られたルネ・クレール監督の映画『Quatorze Juillet』が『巴里祭』と翻訳されたことで本来のフランス革命記念日とは別の日本的な「巴里祭」が定着した。確かに「7月14日」では大半の日本人には伝わらない。映画のタイトルが季語の成り立ちに大いに関与しているのである。映画公開翌年に刊行された高浜虚子編の「新歳時記」には立項されておらず、新しい季語であることがわかる。

『巴里祭』はそのまま「パリ」と読むと4文字のため、俳句では「パリー」と読ませることが多い。「巴里祭」と書いて字数から類推させることもあれば、「パリー祭」と表記している例もある。なかには「七月十四日」と書いて「ル・カトルズ・ジュイエ」と読ませる句もあった。

今回とりあげた句は戦後、銀座の酒場が舞台となっている。それを踏まえなくても切り取られた場面は酒場のざわめきが伝わってくるかのようなのである。シャンゼリゼ通りとも異なる日本独自の巴里祭の雰囲気胸の谷間の汗から感じ取っていただきたい。

※吉田林檎は江森尚子(旧姓吉田:1994/平6)の俳号です。

épris d'autres langues.

Si je dois saluer l'intelligence, le talent, le brio et la force de caractère des étudiants auxquels j'ai eu la chance de pouvoir enseigner à TUFs, au même degré que l'excellence des enseignants-chercheurs qui en font vivre le cœur académique, je ne peux m'empêcher de mentionner un chantier particulier qui a profondément scellé ma relation à TUFs : celui des TUFs Language Modules. Liant l'initiative du programme déjà établi avec le réseau international du programme de recherche Phonologie du Français Contemporain, j'eus la chance de collaborer au développement des TUFs Language Modules pour le français dans ses versions méridionale (avec Jacques Durand, Lionel Fontan et Aurélie Guerrero de l'Université de Toulouse) et suisse (avec Isabelle Racine, Sandra Schwab et Daniel de Pietro de l'Université de Genève). Avec le soutien de l'équipe technique de TUFs, les enregistrements eurent lieu dans le studio de l'Université. Si la version méridionale se passa sans encombre, la version suisse, quant à elle, fut entièrement enregistrée en un week-end, au lieu de la semaine qui devait y être consacrée : il faut dire que les collègues suisses avaient posé le sol au Japon pour la première fois le matin du 11 mars 2011. Le temps passé ensemble à TUFs et à Kichijoji les jours qui suivirent fut marquant. Aujourd'hui, ces modules, uniques en leur genre, sont utilisés dans le monde entier, et ma relation avec TUFs tracée de manière indélébile. Tout cela me revient en mémoire, quand je pense à mes années là-bas, du côté de chez TUFs...